慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	字音形態素「代」「費」「料」の研究
Sub Title	
Author	染谷, 圭一郎
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2021
Jtitle	日本語と日本語教育 No.49 (2021. 3) ,p.150- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20210300-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』49：150（2021.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

字音形態素「代」「費」「料」の研究

染谷圭一郎

本研究は、金銭の意味を表す字音形態素「代」「費」「料」について、前接語基の性格を明らかにすることを通じて、それぞれの字音形態素の意味用法について考察するものである。考察に使用する資料は、『現代書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から抽出した。前接語基の性格は、品詞性、語種、意味分野という三つの観点から分析を行った。

字音形態素「代」の前接語基の品詞性は、異なり語数でも延べ語数でも、名詞とサ変動詞語幹が多く、名詞が約 70％を占め、サ変動詞語幹が残りの約 30％を占めていた。「代」の前接語基の語種は、漢語の比率が一番高いものの、「費」「料」と比べると、外来語や和語にも分散していた。「代」の前接語基の意味分野は「生産物および用具」と「人間活動－精神および行為」を表す語が多く、異なり語数でも延べ語数でも、それぞれ約４割を占めていた。以上から、「代」は語種を問わず、物を表す名詞と結合する、と言うことができる。そして、「代」の中核的な意味を「日常的な経済取引の場面で、物を購入したり、物を利用したりする時の、具体的な物の対価として支払われる金銭を表す」とした。

字音形態素「費」の前接語基の品詞性は、異なり語数でも延べ語数でも、動作性の高いサ変動詞語幹が約 50％を占め、名詞が約 40％を占めていた。また、この名詞の中にも動作性が含意されるものが多く見られた。「費」の前接語基の語種については、漢語が圧倒的に多く、異なり語数で約 90％、延べ語数で約 99％を占めていた。「費」の前接語基の意味分野は、「人間活動－精神および行為」が多く、異なり語数で約 70％、延べ語数で約 90％を占めていた。そして、「費」の中核的な意味を「組織が主体的に使途を決め、一定期間における収支を想定した金銭を表す」とした。

字音形態素「料」の前接語基の品詞性は、異なり語数ではサ変動詞語幹が、延べ語数では名詞が一番多く見られた。「料」の前接語基の語種は、漢語が多く、異なり語数で約 70％、延べ語数で約 80％を占めていた。「料」の前接語基の意味分野は、「費」と同様に、「人間活動－精神および行為」が多く、異なり語数で約 70％、延べ語数で約 90％を占めていた。そして、「料」の中核的な意味を「活動を許可してもらったり、作業してもらったりするような、サービスを享受する対価として支払わなければならない金銭を表す」とした。

本研究では、書き手による誤用や業界内での慣習にもとづく慣用的な言い回しについて踏み込んで考察することができなかった。この点を今後の課題としたい。